高竿灯籠（たかんどうろう）

初盆※を迎える家のご先祖様が、迷わずに自分の子や孫が住む家に帰ることができるよう、遠くからでも見える目印として高い竿の先に灯籠をとりつけたものです。

※初盆＝人が亡くなって四十九日を過ぎてから初めて迎えるお盆のこと。
新盆（あらぼん、にいぼん）ともいいます。

庭先に立てられた高竿灯籠
（平成 22 年大田原市湯津上 県立博物館提供）

～とちぎ人の想い～

「釜の蓋」が開くと、ご先祖様の13日間の旅が始まります。

トウロウに明かりをつけておきますから迷わず帰ってきてくださいね。

亡くなった人を思う気持ちが込められているまるね～。

〈高竿灯籠の説明〉

灯籠を高くかかげる風習は古くから行われているようで、鎌倉時代に書かれた本（『明月記』）には、京都で高燈籠が使われた記録が残っています。

昔は、丸太が使われていたようですが、今では、竹竿で作ることが多いようです。竹竿の先には、杉の葉で三角矢をつけます。竹に、亡くなった人の歳の数だけ縄で作った輪を巻き付ける地域もあります。

以前は、小さな滑車とひもを使って灯籠を上げたり下げたりしたようですが、今では多くの家では電気で明かりをともしています。

コウカトウロウ、タカトウロウなど地域によって様々な呼び方があります。

県の北部から東部（芳賀郡や那須郡、塩谷郡を中心）にかけて、現在でも作られています。